

平成26年度 第4回安曇野市新市立博物館構想策定委員会 会議概要

1	会議名	平成26年度 第4回安曇野市新市立博物館構想策定委員会
2	日 時	平成27年2月19日(木) 午後1時30分から午後3時30分まで
3	会 場	安曇野市明科複合施設 講義室
4	出席者	笹本委員長、石田副委員長、小林委員、浅見委員、浅川委員、小椋委員、大月委員、酒井委員、西垣委員
5	市側出席者	北條教育部長、那須野文化課長、熊井博物館係長、小倉博物館係員、逸見博物館係主査、亀山(乃村工藝社)、横山(乃村工藝社)、中瀬(乃村工藝社)
6	公開・非公開の別	公開
7	傍聴人	1人 記者 0人
8	会議概要作成年月日	平成27年2月27日

会 議 事 項 等

1 会議の概要

1. 開会 (北條部長)
2. 笹本委員長あいさつ
3. 協議事項
  - (1) 施設の整備方針について
  - (2) その他
4. その他
5. 閉会

2 会議概要

1. 開会

北條部長・・本日は、市内博物館施設の整備方針についてご検討いただきたい。なお、本日は福島委員、平田委員、滝沢委員がご都合により欠席されている。また西垣委員は10分ほど遅れるとの連絡をいただいている。

この委員会の設置要綱に基づき、半数以上の委員の皆さま方に出席いただいているので、委員会として成立していることをご報告させていただく。

それでは笹本委員長からごあいさつをよろしくお願いいたします。

2. 委員長あいさつ

委員長・前回は大雪で慌てて帰り、まさに雪の中の出発になったが、今日は非常にいい天気になった。皆さまお忙しいところをお集まりいただき誠にありがとうございます。これから大事な審議をしていくので、引き続きご協力をお願いしたい。

北條部長・・それでは委員長のほうから議事の進行をよろしくお願いいたします。

3. 協議事項

(1) 施設の整備方針について

委員長・既に皆さまには事前に書類はすべてお送りしてある。本日は最初に確認だけさせていただきたい。第3回の会議録の確認については、皆さまのお手元にお送りし、発言内容についてご確認いただき、校正があれば事務局までご連絡くださいとお願いしていた。事務局のほうに尋ねたところ、何もなかったということなので、まず最初に前回の部分に関しては、これで決定させていただきたい。皆様のご発言に関して、これで決定させていただきたいということを、最初に確認させていただきたい。

(委員より意義なし)

よろしいですね。では、本日は、一番問題になってくるのは施設の整備方針である。前回はケース3ということで検討してきた。すなわちケース3というのは、施設整備を行わないで既存施設を活用するという、その中で意見をうかがった。本日はケース1、元を正すと平成27年2月4日の安曇野市公共施設評価その他に関係して、あるいはこの前の委員会、それから、その前の委員会、あるいは市長も最初の公約で博物館をつくるというのがあり、博物館とはどういうものであるかということフリーな立場から、少し夢を語りながら検討できるのがケース1ではないかと私は思っている。

ただ、実は博物館が随分変わってきている。本日小椋委員から、見学したところの概要等について検証等をいただいているが、まずは私たち自身が、博物館がどれだけ変わっているのかということ認識したほうがいいだろうと思い、乃村工芸社に最新の博物館について少し講義をしていただきたい。その上で本日の議題に入っていきたいと考えた。

そこで、今の博物館、最新の博物館というのはどんな点に着目しながらどんなふうになっているのか、ご説明いただきたい。

(乃村工芸社からプロジェクターで写真を映して説明)

委員長・どうもありがとうございました。まず最初に、皆さんにお聞きいただいたのは一番最初に近隣の大町の山岳博物館が出てきたが、随分周りが変わっている。それから極端かもしれないが、つくる会社、今は乃村工芸社さんに来てもらっているが、丹青と乃村工芸社ではまた微妙に違って来る。最終的にどういうものをつくりたいか、われわれのほうがかちんとした理念を持っていたら、それに応じてつくってくれるのが会社のほうだと思っている。まず、皆さんに具体的な状況としてこんなにも私たちの思っている博物館と違うという一端を見てもらった。

それで今日はケース1について論議していくが、ケース1というのは新市立博物館を新規建設するという、出発点からあった、本来やらなければいけなかった部分だと思っている。ただ、いろいろ情勢も変わってきているので、まずケース1の場合には何ができて何ができない、どこに問題点があるかということ簡単に事務局のほうからご説明いただき、皆さまの意見をいただきたい。

(熊井係長より資料の説明)

委員長・ありがとうございます。見ていただいて分かるように、事務局は非常にきれいに整理してくれて、私たちが言った言葉を博物館の役割として、「収集保存」、「調査研究」、「発信連携」その他に分けた上で、何が重要であるかということを確認し、前回のケース3の場合ではどうであるかというのを分かるようにしていただいた。おかげさまで、私たちとしては博物館がどうあればいいかという大きな要素は確認できたように思う。

そこで、本日問題にしなればいけないのは新市立博物館を新規に建設する場合だが、下のほうに書いてあるとおり、ポイントが大きく三つある。一つは全市的に直面してきた課題を解決することができる。今までも何度も出てきているように全市としての動きが非常に弱かったことを、きちんとやれる。それから新たな安曇野を、新しくつくるということで発信ができる。新しくつくるので、古いもの幾つかはこちらのほうに吸収することができる。逆に言う一番大きな課題は、施設規模によって違って来るが、多額の建設コストがかかってくるということになる。

その上で、整備方針として、ちょっと黄緑色に近いようなマークをしてもらっているけれども、新博物館の整備方針としてこんなものがあるのではないかということを出していただいた。

それでは、このケース1についてご自由に発言をお願いしたい。

何か補足があれば。

那須野課長・前回は、それぞれの館ごとに、ケース3においては、どうしていくかということ短期、中期、

長期的な視点で割り振りを試みた。要素の割り振りという視点であり、施設そのものをストレートにどうしていくかということにつながる見方だったが、皆さんからは細かい要素にこだわるよりも、もっと全体的な理論の中で物を見るという視点が必要というようなご意見が出たかと思う。従って今回も、このケース1については、当然大きな統廃合を伴うことになるので、一応その議論は後でまたご説明するところだが、本来やはり短期、中期、長期的にそれぞれの館がどうなっていくかという視点がやはり必要になってくる。

ところが、単刀直入にそこに入ると前回と同じ議論になってしまうので、今回はもう一度、原点、博物館の四つの役割という視点で、それぞれの館をまとめてみた。

今日いただいたご意見と、それから別の資料にある今後の利用継続の検討、この二つのご意見をもらった上で、次回の会議で、ケース1のどこを統廃合していくのかという現実的なハードの取りまとめにつなげたいというのが今日の会の趣旨であり、それを踏まえてご意見をいただければと思う。

つまり今日、役割の視点からとりあえず物を見るというのが一つ、それから利用継続をどういうふうに考えていくかという視点から物を見る。これはまた後で説明するが、例えば耐用年数が来ている建物は廃止してもいいのではないかとか、利用人数が少ない、どのぐらいが少ないかというのも微妙ですけども、あまり少ないのは役割を終えたとかというふうに判断できなくもないので、そういう要素を幾つか積み重ねて、これは統廃合していてもいいのではないか、そんなようなところと両方を併せてケース1のほうをつくり上げていきたい。こんなことで、どうぞよろしくをお願いします。

委員長・ どうもありがとうございました。今話が出たが、私としてはまず最初に新市立博物館をつくる際には、整備方針として何をしたら何が解決できるのか、これは非常に重要な部分で、その上でもし皆さんの理想とするものをやっていくときには、次の段階として既にあるものをどうするかということで統廃合を考えなければならない。

そこで、前半部分においては、新しい博物館をどうしていればいいのか、どこに魅力を感じるようにしてもらいたいのかとかという点でご自由に発言をしていただき、その後で、課長のほうから説明があったとおり統廃合の問題を考えていきたいと思っている。

ですから新市立博物館をつくる場合に私たちが問題にしてきた収集保存、調査研究、発信連携、育成創造、こういったような部分で何に着目したり、何を重要視したらいいのか。安曇野市らしいって一体なんなのか。そういったことを少しご自由にご発言いただいて、それを基礎にして次の博物館に持っていきたいと思っている。

委員・ いつも質問で発言が終わっているのので、今日は質問と意見と両方言わせていただきたい。前回は質問したが、陶芸館、この位置付けが私はどうしても気になっている。市で表した公共施設白書をチェックしたら陶芸会館はいわゆる博物館・資料館の範疇には入っていないくて、その他の生涯学習施設にしてある。だから前回、入館者の人数を調べて出てこなかった理由が分かった。だから市の内部で捉え方がちょっと違うように思ったのだが、どうしてそういう違いが生じたのか。この質問については、また後で答えていただければと思う。

もし、市の白書で言っているようなことであれば、陶芸会館というのはただ単に陶芸教室である。そういう捉え方をすれば、ここであまり深入りする必要はなくなる、そういうことになると思われる。

これからつくろうとする博物館については、今の郷土博物館を主体にせず、その延長線上になんらかの新しいものができるというイメージはよく分かる。しかし、発信連携の展示の部分だが、あれも欲しい、これも欲しいと、あるもの全部展示してもあまり興味はないのではないか。

この間、ふと考えたのだが、やはり、さっき委員長がおっしゃったとおり、安曇野らしさ、そこをポイントとして押さえて、「安曇野はこれだ」というものを前面に出して、それを売り物にしていく、なおかつ実体験もできるような、そういうテーマでやらないとこれからの人口減の中では対応しないしお客さんも来ないと私は思う。

その延長線上にあるのだが、田淵さんの記念館について言うと、田淵さんは山岳写真家で芸術家でもある。彼のやった仕事というのはチョウの観察を通して自然を見つめたわけである。それで安曇はどんなふうになってきたか、そういう自然環境の変化ということに関して、田淵さんは最後のほうで非常に悲しんでいた。だから田淵さんを枠組みに入れるとすれば、ナチュラルリストとして自然の分野、博物館に私は入れるべきだと思う。

委員長・ありがとうございます。まず先に陶芸館について、市のほうから説明を。

那須野課長・陶芸会館については、旧穂高町時代、昭和58年ごろに建てられた施設である。半分は展示施設になっており、これは所有の方からご寄附いただいた焼き物を現在展示しているということである。一方、もう半分は作陶施設になっており、非常に多くの方々が陶芸を楽しんでいらっしゃる。窯もあって、実際に焼いている。

実は、旧穂高町時代に財団で運営していたものを、直前に穂高町に財産寄贈してもらい、安曇野市で維持管理している。途中から教育委員会の施設になった。旧穂高町時代の財団で運営していたときには学芸員もきちんと置いてやっていたということだが、開館して5年ぐらいで入館者の減少とか予算とかで行き詰まって3年ぐらい休館に追い込まれたというような部分もある。それ以降は学芸員もいないということである。

あと、入館者がほとんどいらっしゃらないというか、入らない施設であり、ほとんど作陶だけで今は回っている施設という、そんな位置付けでもある。これが今、条例上は陶芸会館だが……。

委員・その名前の条例と書いてある。だから、陶芸会館条例。

那須野課長・うちのほうで持っているという。統計のほうに乗ってこなかった理由については、今日答えは持ってきていないのだが。博物館施設として位置付いているかといえば位置付いているのだが、ほとんど入館者がいない施設であり、作陶施設のほうが主な施設として運用されている。

これをどうするかというのは、ここで最終的に決めていかなければいけないと思っている。例えば、焼き物だけでは見ていただけない現状なら、美術館のほうに引き上げて、作陶施設だけで運営していくとか、いろいろ今後の方針については検討の余地はあると思っている。

委員・白書の中では、例えば25ページに一覧表があって、美術館や博物館や資料館、ここには出てこない施設、例えば福武記念館など、こんなものがあるかわりに陶芸館がない。だから陶芸館のところを見ていくと項目には、あの壺の類は安曇野にはゆかりのないものだ、と、あまりいい書き方はしていない。だから、そういうことであれば、ここであまり陶芸館について真剣に考えるのは…ちょっと失礼な言い方になるが、少し思い切って、陶芸教室などに割り切って横へ置いたほうが話は楽じゃないかというふうに思うのだが。

委員長・今の話だが、この次にやらなければいけない統廃合の問題ですばっと切るのだったら切る、それを決めればよい。先ほど話が出てきた田淵行男記念館も同じことである。

一番重要なことは、安曇野らしい博物館はどうあるべきか、つまり一番重要な点として、発信として安曇野は一体どうあるべきかということを考えましょうというふうに言われたように私は理解した。

そうすると、発信するための下準備として資料収集は一体どうであって、発信するためには研究はどうであるか、それを発信する前提として次の部分の市民とか生涯学習は一体どうするかということ論じなければいけない。そういう意味で、委員が言われた安曇野市らしい博物館が大事だということ、この辺を含めて皆さんのほうからご意見をいただけないか。

もう一つ大事だと私が思ったのは、あれもこれも無理だということ。それからお金のこともある。大町の場合は、山に特化した小さな規模の博物館である。本を正すと、あそこでもあまりお客さんが来なくなっている中でどうするか、今回の博物館の状況を見ていただければ分かるように、いい博物館は地域住民と密接なかかわりを持っている。先ほど出た一支国博物館は、明らか観光スポットにするしかない、次の時代をつくっていくにはそれしかないということまで考えてやっている。

そういう意味では、安曇野市らしさ、それをやっていく後ろのほうの部分まで博物館は考えなけ

ればいけないと思うので、ぜひご意見をいただきたい。

委員・ ・では、ついでにということで、先生もたぶん同業の方だと思うが、検索したら小さなレポートが出てきた。東京の八王子のほうでアンケートを取ったと。そのときに、安曇野に対してどういうイメージを持っていますかという質問に対して「水」という回答があったというのを見たのだが、先生はそういうことについて…。

委員長・ すみません、今のは誰に宛てた、どういう状況でのものか。

あくまでもイメージなので、積極的に市がつくり出せばイメージはつくれる。今あるイメージをうまく利用したいのなら、利用すればいい。それから、博物館は観光客のためにあるのではなく、大前提はあくまでも市民の皆さんのため。市民の皆さんが何を見たい、あるいは市民の皆さんに何に気が付いてもらいたいのか。それが大前提なので、逆に言うと、アンケート等よその人の意見よりも、例えば、私としてはこれが一番大事だ、それをやるためにこういう展示が欲しいとか、そのためには何が足りないからこういう資料を収集しろだとかというような論議のほうが、博物館づくりのためにはいいのではないかと思われる。

すみません、どなたでも結構なので、そういうことを少し言っていただければ。

委員・ ・私は、どこに行っても「安曇野って文化があるよね」ということをよく言われる。なので、文化を大事にする土地なのだとすることを発信したいと思っている。この前、自然の博物館が大町とか松本とかにあり、行ってみた。そうしたら、山岳に特化しているものだったりとか、松本市のほうも松本を特に知るといっているのではなく共同展示が多かったりとか、違いがあった。

しかし、安曇野らしさには、両方とも触れていない。例えば複合扇状地であるために湧水などがあって、そこから起きてきた事件とか歴史とかがあると思う。

だから、第一は文化を大事にしている土地だということを全国に発信する。そのためには子どもたちに利用してもらおう。市民の利用を促す人とともに、来る人も育てたい。この前も人を育てたいと言ったが、それは学芸員とか案内ができる人はもちろんなのだが、利用する人を育てられるようにしたいなという思いがすごくある。

新市立博物館をつくるために、この委員会に入れていただいたつもりだったが、どうもケース3に傾いてきて、そっちが強いのかなと思って、いろいろなところに行って現状を見始めた。私としては新市立として主に新しい安曇野を発信するための博物館をつくるのがすごくいいことだと思っている。

過去の生活については、民俗資料とか使ってほしい資料があるが、生活環境が変わってきた理由に開発があり、昔の道具は必要なくなってきた。これらは一度失われてしまうと二度と制作できないと思う。それは未来の子どもたち、これからの未来を担っていく子どもたちにとっても貴重な文化であり、生きた資料にしなければいけない、死んだものにしてはいけない。あれもこれも駄目だということもあるが、やっぱりそれも大事。それから、そういうのを育ててきた歴史上の人物も大事。

すごく長くなってしまいが、今いろいろな講座とかに出させていただいている。臼井吉見記念館で、望月桂さんの講座に出たときに、いろいろな社会運動的なことをしており、大杉栄さんと交流があったという。たまたま東京に行って昆虫の話聞きに行ったところ、ファール昆虫記を初めて昆虫記と訳した人が大杉栄だと。そういう、全然違うところから結び付いていて、すごくおもしろいなと思った。

だから、望月桂さんを取り上げれば、興味ない、おもしろくないと思うかもしれないけれども、そういうつながりとか、子どもたちが興味を持つ歴史の紹介の仕方とか、そのようなものを入れたいなと思う。

委員長・ 重要な視点をいただいた。まず先に、私は先ほどちょっと触れたが、委員から大町山岳博物館と松本市山の自然博物館、それから市内の博物館を歩いた感想等をいただいている。できたら、この次のときに皆さんにご配布いただければと思う。それは委員がこういう立場になって、少しでも多く歩きながら自分の理想とする博物館はどうあるべきかということをお考えいただいている

という意味で大変ありがたい。

今のお話はこういうことではないかと思う。基本的に全てのものはつながっていて、今までの博物館というと、ややもすれば一つだけ、例えば歴史博物館とか自然博物館ということで特化してしまっているけれども、そうではなくてきちんといろいろ運動させる博物館を考えるべきだ。運動させる博物館というのは、今のお話だと、例えば安曇野市ではオオルリシジミの保護育成をやっているが、オオルリシジミの背後には人の生活があって、原野に火を入れなくなったら途端にチョウチョがいなくなる。つまり自然は決して自然のままではなくて人間とのかかわりもあり、そこには歴史もいろいろなものがあるのだから、そういうことが着目できるような新たな博物館をつくるべきだ。今までの博物館は、ややもすると既に老朽化して展示会も何もされていないのだから、むしろそういう意味で次の博物館をつくるのが大事ではないですかという意見だと、私は理解した。

委員・・ありがとうございます。

委員長・だとすると、やはり新しいものをつくるしかないということはあるだろうと思う。そういうことをするために、では、今までのものには何が足りないのか。博物館というのは、あるものをそのまま見せるのではない。先ほど委員のほうから「水」という話があったが、水の展示のためには何をを用意したら展示ができるか、という問題になる。

私事だが、『安曇野風土記』を書いているときに三郷で瀧し井戸を初めて見せてもらって「瀧し井戸ってすごいね」という話をしたら、三郷の村誌を書く段階では見つからなかったものが「すごいね、すごいね」と言っているとやっぱり集まってくる。そういう意味でいうと、収集、保存、展示全てがセットになっていくために博物館はどうあるか。

今、積極的に、そういう新たなものをやるのだったら新しく博物館をつくらざるを得ないのではないかという意見として聞いたが、皆さん何かご意見があれば、委員に対してでも、ぜひ意見をお願いしたい。

委員・・私も、なかなかあちこちの施設に足を運ぶことができなかったのだが、やはり現実を知らなくては何も話が進まないと思い、この間郷土博物館の講座を受講にいった。ちょうど小椋委員と一緒にいった。

その講座、中身的には十返舎一九のことですごく勉強になったが、冷暖房もない、そして暗い。環境としていろいろな条件が整っていなかった。その中で講座というようなものを考えたときに、もう少しきちんとしたものが整えられているとよい。また、子どもだけではなく、本当に大人もいろいろ学んでいくことが大切だと思う。そういうことを考えると郷土博物館は、先ほど写真でも見たが、体験型であったりそれから映像から捉えたりとかいろいろな角度から安曇野らしいことが学べるような、そういう環境をつくっていくということが絶対に必要だと思う。

そして、郷土博物館もいろいろ見てみると建物自体ももう古いし、展示スペースもないし、学習するところもないし、収蔵するものも限界だというような状況があるので、やはり郷土博物館は新しい、いろいろな施設のあり方を取り入れながら新設していく。その取り入れる、どのようなものをつくっていくかというのはもっと市民の声を聞き、この委員の中でも真剣に考えてやっていく必要があるのではないかということを痛感した。

その後、豊科の近代美術館にも足を運んだのだが、私の把握する範囲では、あれはあれでいいと思われる。なので、豊科の郷土博物館を基幹博物館にしていくのだったら、ぜひいろいろな要素を取り入れた新設を考えていったほうがいいと思う。

委員長・いろいろ動いていただきまして、ありがとうございました。見ていただいて分かるように、実は豊科町の段階でつくられた、町の段階でつくられた博物館の規模と市の規模とは全然違う。ただ、そのままというわけにいかないというので、非常に少ない予算で次々の中を替えながら、今のような講座等を開いていただいているというのが実情である。

豊科郷土博物館は、学ぼうとしても、実は冷暖房もしっかりしていない、建物もぼろぼろ、皮肉で言うと、あと50年経つと、うまくすると文化財になるかもしれないが、私たちが学ぶのには

ちょっと学びづらいだろうと思われる。

その意味で、いろいろ勉強するためには、子どもだけではなく大人も勉強するためには、やはりいい博物館が必要ではないかというご意見であったが、ほかに何か。

委員・・前回会合で欠席してすみませんでした。

先ほどからいろいろ意見をお聞きし、写真も見せていただいたが、まるっきり私の考えと、今現在の博物館も変わってきて、憩いの場所的な位置付けの施設になってきていると思う。

そういう中で、このポイントにもあるように、「安曇野らしさ」として、自然とか水関係がポイントになってくると思う。例えば、3川合流でお水取りをして、上高地奥社へお水返し、それでこの地域が潤って食文化が栄えてきた。そういう歴史的なことも踏まえて、食文化の関係も大切だと思う。

それにはやはり、郷土博へ行ってみると、水田耕作の農耕馬を使ったようないろいろな歴史的なものが残っている。そういうものの歴史的な流れについて、たいがう頑張っていたいでいる。今言われたように、建物自体は古いが、学芸員の皆さん方の努力、こういうものが今現在の郷土博の表へ出ている大事な点だと思う。

器はそうだけれども、やはり中に入っている人というのは財産である。そういう財産の皆さん方が苦労されていること、これは大変立派なことだと感じている。だから、ケース1で新しい美術館を立ち上げるといことになれば「器は新しくなったけれども中身は」と言われたいような、そういうものをつくっていったらどうかと。

やはり子どもから大人まで気楽に利用できる、先ほど委員長も言われたように、外部から来る観光客、それも大事なことだが、やはり地元の皆さんが気軽に憩える場所として寄与できるような、入りやすい雰囲気施設の施設、規模、こういうものも検討の中で必要になってくるのではないかと。人が集まるような施設にしてもらいたい。

委員長・ありがとうございます。私が安曇野市に足しげく来るようになった、好きな理由の一つが「きぼう」とか「みらい」とかよそにない図書館である。あれができたことによって人が集まり、そこで学び始めていると思う。先ほど、最初に乃村工藝社さんに見せていただいたものでも分かるように、もう博物館のイメージを変えないといけない。

図書館も従来と違って、「本があります」という時代ではない。私どももそのために、いろいろ動いているつもりである。博物館も基本的には安曇野市の人おこし、安曇野市の観光、いろいろな要素がある、それが大事だということをお願いしたいように思う。

そのことは、大変失礼な言い方をすると、私は安曇野は文化が果てていると思っている。新しい文化をつくっていくところにほとんど行っていない。今までおんぶに抱っこみたいな、地域ごとに文化があるという時代ではなく、それを総合してもっといい文化、今よりもっとよい未来を創っていくためには何があったらいいかということを考えていくべきだと私はずっと思っている。

そういう意味でいうと博物館は、今まで皆さんが言われているのは、次の時代をつくっていくためには、やはりどうしても必要な施設として、(博物館を)つくったほうがいい、そのやり方として、まずは人を大事にしましょうと。人がなかったらいいものはできないし、安曇野市らしさというのを考えてもらうのは、私たちも考えるけれども、委員も考えなければいけないし、いろいろな人たちが考える、市民も考える。でも箱が必要だということになるのではないかとと思われる。そういう意味でいうと、今のところ皆さん、全員ほとんど同じような意見だと思う。

委員・・この間しゃべり過ぎて、ご迷惑をかけたのですが。

やはり夢を描いてみると、ここの土地柄というものをみんなで考えてみたとき、北アルプスがそびえ立ち、その下にまれに見るような豊かな土地柄が広がっている、そういうことが安曇野の一番のポイントではないかなと、私は思う。

それで、前にととも反省したのだが、神代の時代からここの土地は黄金の稲が実る土地というふうに私は発想したことがある。そのときに中島博昭先生が「そうじゃないよ。先人たちがこの土地を、こういう豊かな土地にするために一体どういう努力をしてきたかということをおあなたは知

らないね」と、非常におしかりをいただいたことがあった。

それで、私もこの土地に住まわせていただいているので、いろいろなことを調べてみると、やはり水にちなんだ安曇野の発見というものが非常に大きかったと思う。自然の伏流水というものを豊かにもらって、安曇野がお水で困ったときにはそれこそ日本じゅう生きていかなれないところになるのではないかな、そんなふう思うぐらいお水のおかげで私たちはここで暮らしてきていると思う。

そのために、拾ヶ堰など、豊かな水田地方がどのようにして出来上がってきたか、などということは、安曇野に住む私たちにとっても、それから日本全国あるいは外国の人にとってもすごく大きな事柄であって、そういうことを含めて安曇野が発展してきているのではないかと思う。そして、そういう豊かな土地柄ができる中で、すごくたくさんの民話も生まれ、そして人物も生まれしてきたというふうには私は感じている。

そういう私たちの誇れる現在の安曇野の歴史、そして未来が展望できるようなものが私たち大勢の意見で出来上がってくれば、それは大勢の人が利用して下さるすてきなものになっていくかな、そういうふうな夢を持っている。

委員長・すみません、ちょっと確認をさせていただきたい。3つのケースとも、今のものはやっていかなければいけないと思っている。今言われたことはどのケースであってもしきちんとしていかなければいけない。とりあえず今は、新市立博物館をつくるべきか、つくらないべきか、一つ新しいものをつくってそれに対応するようにしていくのか、それとも既存のものを利用するのか増設するのかという部分で論議している。今の話、それから前の話もそうだが、つくるのだったらここここに重点を置きましょう、というのは次の段階、博物館構想の中で論議していくべきだと私は思っている。

そこで、今の話をちょっと読みかえると、水がすごく大事である、ただ、今までの博物館は全て、安曇野として一つもやっていない。市町村ごとにやっているのだから安曇野市全体が分かるようなものにするためには新博物館が必要ですか、それだと豊科の今の部分では無理でしょうか、そのところを言っていただきたい。

委員・今の夢をかなえるためには、今までのものではとてもとても足りない。足りないので、やはり本当にみんなが安曇野ってすてきと思えるような新しいものをつくっていく中で、今までのものも役割を果たしていただく。

それからもう一つ、この間も博物館はもうからなくていいというご意見も出ていたが、私はそういうふうには思わない。新しい博物館ができたなら、その半分ぐらいは入館者で賄えるような、そういう施設にしていかなければ、市の財政も厳しい中でとてもじゃないけどやっていけないように思われる。

それで私は勉強してみたのだが、信濃町は1万人ぐらいの人口があり、黒姫童話館、ナウマンゾウ博物館、一茶記念館、その三つを巡るように仕向ける政策をしているようである。

聞いてみると、3館で年間10万人ぐらいの人たちが訪れている。なぜそのように人が来てくれるのか考えると、それぞれの館が個性的である、1万人ぐらいの人口の市に10万人の人が来てくれるというのは非常に大きい。野尻湖ナウマンゾウ博物館は7割ぐらいを入館料で賄えるだけ入館者を得ていると聞いてきた。未来を展望するなら、そういった経済面も含めてどうつくっていくかということを私たちが構想していかなければならない、そのように思った。

また、今日もたくさんしゃべって申しわけなかったが、いいかげんなことでは今のままで保存的にやったほうがましだというような、そういう気持ちも非常に強い。

委員長・ありがとうございます。今の部分だが、博物館機能の一番後ろのところを経済的な部分を付け加えましょうという提案にしてもよいか。

というのは、繰り返して言うが、博物館をつくるか、つくらないかという部分が今の段階で一番大きくて、三つの案のうちどれにしていくかということが一番大事なことである。いずれにしろ博物館をどうするか、その中に従来の中では足りない部分として地域おこしの原動力になるとか、



もっと教育にしましょうとか、それから逆に言うと人に来てもらえる博物館とは来てもらえるだけの準備をしないと無理、普通にやっていたらとても無理だと。

でも僕は、逆に言うと、そういうことを前提にした上で、建設のときの委員会にしっかりやってもらうべきであって、私たちとしてはメインの展示に水を入れてほしいとか、こういうものがありますよとかということをしっかり主張する。それで市民の皆さんからもいろいろなアイデアをいただいて、こうすれば人が来てくれるのではないかと考えていくべきだと思う。ただ、繰り返すが、今までのかたちで博物館をやっているも限界があるし、きちんとやろうとするのだったらきちんとしたものをつくるべきだという意見だと思う。

付け加えて申し訳ないが、私は安曇野を歩くたびに思うのだが、安曇野は一つではない。ここは旧明科の筑摩郡で文化も違う。皆さんも「安曇野」と言うときには、はっきり言って旧安曇郡のほうしか考えていなくて、「全体としての安曇野」というのはまだまだ弱い。本当を言うと、向こうのほうの捨ヶ堰のほうを見たいのだったら、こちらを比較しながらじゃないと見れない部分がいっぱいあるのだけれども、そういうような視点も含めて新しい市全体を見渡すような博物館をつくる必要がある、だから新しいのにしませんか、というふうに意見として出てきたとに理解させていたいただきたい。

委員・まずケース1の、先ほどのA3の資料の6ページ目を拝見している。黄色いマーキングをさせていただいているところをさらに申し上げるというのも屋上屋な感じもするが、この6ページで私が一番重要に思っている部分というのは、「市民」という言葉が随所に出てくる。これは、素晴らしいことだと思う。私も市民の意見を述べるという立場で、ここに今寄せていただいているかと思う。今の安曇野市の各施設、見学もさせていただいたが、残念ながら市民がそこを拠点にして何かをするという発想はあまりないし、現実的にもできない。郷土博物館のこたつを囲んでの講座というのは、私はまだ都合がつかなくて参加させていただいていないが、すごく意欲的なことだと思う。しかし、まだまだ市民の大勢を招き入れるとか、いろいろなテーマで勉強会を開くとか、そういったことは今の安曇野市の博物館の業務の中では明らかに不足していると思う。

従って、このケース1で調査研究のところにも、しっかり市民の話がある。それから育成創造の「設立準備段階から市民が参加し、市民協働の基盤をつくる」、これはすごく大事なことだと思う。こういうスタンスで行ければ、新しい博物館をつくって、ある意味、安曇野市の改革のパワーになるのではないかとこのように感じている。

それからもう一つ、私が注目している点は、空き家とか廃屋問題というのが今、日本全国いろいろな市町村で問題になっていて、基本はとにかく危険極まりないと。防犯上、それから耐震性、火災の問題、全てのことで空き家というのはネガティブなものだということに言われている。壊せ、壊せと。壊れかけた建物はどんどんぶっつぶして、更地にしてしまえというような発想で物事は動いているような、主張の大部分はそんなふうに見える。

具体的な数字を、たまたま目にする機会があったのだが、2013年の日本の空き家率というのは13.5%、実数で820万戸だそうです。あと10年ちょっと、15年ぐらいすると空き家率は25%に達する。つまり4件に1件は空き家になる。それを今申しましたように、みんな壊して木材のくずにしていいのか。たぶんこの中には貴重な時代の証人となるべきものがあるはずである。さりとて、では、それを全部どこかで保存するかといったら、安曇野市がどんなに大きな新博物館を建てても納め切れない。そこにたぶんいろいろな知恵が必要になるだろう。

ただ、空き家を一方的につぶさないとか、そういうものを大事に、その中の文化遺産を大事に継承するという発想になれば、新しい博物館の能力に期待するしかないかなということを感じている。

委員長・どうもありがとうございます。ただいまのご意見として非常に大事なものは、今回の新市立博物館構想の中には、設立準備段階から市民が参加するのだと。つまり、こういうことを通してもう一回文化をつくりながら新しい博物館を考えるという視点だったらいいだろう。もう一つ、今までの委員からも出ているが、そういうためには、やはり学芸員。学芸員によって随分違って来る。

ただし、学芸員がいくら動こうとも、場が用意できなかつたり、材料がなかつたらどうにもならないので、博物館づくりは大事じゃないかというふうに言っていたように思う。

委員・4点申し上げる。

まず1点目は、何をテーマにした新博物館を構想したらいいかということだが、今まで出ている郷土文化というのは一つあると思う。もう一つは、人物をテーマにした博物館。ただ、これがどこまで多くの人の興味を呼べるかというのは少々疑問がある。

博物館の機能として何が必要かということだが、博物館の建物だけではなくて屋外も含めた野外の活動ができる、あるいは野外の展示も見られるというような、少し広い意味での博物館を構想したい。

それから展示物が固定しないように、収蔵庫をしっかりとつくってもらって、展示物を入れ替える。固定してしまうと1回行って終わりだが、リピーターを呼ぶには展示物の入れ替えが必要なので、それができる場所と人がいる、ということが重要だと思う。

それから最後に、ポイント3に「多額の建設コスト」とある。これは、将来の子どもたちの借金で私たちが建てていくことになるが、市民にとってそれだけのメリットがあるのか、これで観光客を呼び、人を集めてくることができるかどうか。借金を背負わせてもよしとするのか、借金はやめてこのまますたれるのを待っていくのか、そこの大きな判断をしなければならないし、お金の計算をしなければいけないと思う。

委員長・どうもありがとうございました。すごく大事な指摘があった。まず一つは、先ほどまでの話の中に「水」の問題が出てきたが、先ほどちょっと話をされた郷土文化という部分で、文化をもう少し柱に入れる方策を提言してもらおう。それから郷土の生んだ人物たち、これも柱の中に入れられる可能性がないか。

それから、私は個人的にこれが一番大事だと思ったのだが、博物館を建物だけではなくて屋外展示を含めた広い空間を用意する。実はどこでもそうできて、何度も言うようだが、県内のものは場所が非常に限られている。ちょっと外に出るともう普通の生活ではやっぱり気に食わなくて、少し森があったり、人がバリアになるような部分があったらいいなという気がする。

いい博物館は、やはり空間、森のような中でやっていたりするところもある。新しい博物館をつくるのだったら屋外展示ができた、夢があるような場所をつくりましょう、これはすごく私にとってはありがたい意見だなと思った。

もう一つ、今のと直結するが、収蔵庫が大事ですよ、と。私は、今日欠席なので申しわけないが、福島委員たちがやっている県立美術館は、大きなものをぼんとつくってしまったために、ほとんどつくり替えができない。だから、1回行くともういいやという気になってしまう。基本的には、リピーターを獲得するには入れ替えや何かが必要。でも、入れ替えをするためには、いい収蔵庫が必要。

実は私、声高にしていつも言っているのだが、収集保存が基本にあるはず。今までと違って、収蔵庫はどこも博物館も、いい博物館であればあるほど、大きくなっている。しかも、収蔵庫はつくって1年なり2年なり、空気を出して、中の有害物質を抜いてからじゃないと物は置けない。そういうところまでみんな気を遣っている。ややもすると、博物館というと情報発信の部分だけに着目されるが、本当は展示を次々に変えていくためにも収蔵庫がすごく大事である。これは大変重要な視点を言っていた。

最後にコストの問題。これは、最終的には政治判断になってくるだろうと思うが、基本的にお金をかけるということは一体どういうことであるか。お金をかけても市民にとってプラスになるだけのものではあつたら、やはりやるべきだし、そうでなかつたらやるべきではないということを含めて、非常に必要な視点からいろいろご意見をいただいた。

副委員長・私は、先に博物館協議会のほうへも所属させていただいて、新潟、富山、それから相模原（市立博物館）と山梨、あちこち博物館を見せていただいでうらやましいな、こういう博物館があれば

いいなど、私なりの博物館という観念で見えてきた。

今日、またプロジェクターで見せていただくと、こういう博物館もある、今まで見てきたのと随分違う、すなわち時代は動いているということ。ここのところ急速に、博物館自体の考え方、いわゆる展示の仕方、それからそれをディスプレイする学芸員さんの皆さんの考え方、それが非常に変わってきているなという思いがした。

この安曇野市で、立派な市庁舎もでき、それ以上にまた立派な博物館ができるのかどうかと、一番先に私の頭の中に来たのはそのことである。欲しいのだけど、それほどの力が安曇野市にはあるのかと。

そういうわけで、今もう委員の皆さんから非常に問題点やら出していただいてありがたいと思う。私は上田市の生まれで、文化の違いとして、この安曇野の特徴というのは、前々から申し上げているとおりだが、上田市別所温泉の里では、水はためておくものである。流しちゃ困る。流れていっては、われわれが干上がってしまう、それがあそこの土地柄である。最盛期には大小二百幾つものため池があって、一粒たりとも田んぼに入れる以外は千曲川に流さない、湯の水さえも川に流さないでそれを使うという、そういう文化の場所であった。

ところが安曇野へ行くと、とうとうと川が流れ、とうとうと山から水が流れ下って、四六時中流れっ放しで、もったいないところだなと。ところが、それは扇状地として地下に潜ってしまう、川尻へ行って湧き出してくる、そういう違いに非常に驚きを感じた。だから、私はよそ者として安曇野がすごいと思うのは、いわゆる山と川の素晴らしさや、そこを潤している水や、そこから生まれてきた、そこで育った人たちの教養、文化、そういうものがいっしょくたになった素晴らしいもののはずである。

しかし、どれを取り上げていけばいいか、それには限りがあるということになると、ある程度山と川とに表れている、安曇野の優れところはそこにある、という視点だけは外してはならないなという思いがある。

一生懸命皆さんの前のご発言も読んでみたが、お年寄りのぼけ頭ではじきに消えていってしまうので、何遍か読ませていただきながら、今日ご意見をいただいて、私がいろいろと申し上げなくても十分ご意見を頂戴できたと思っている。

委員長・どうもありがとうございました。全体を通して、6ページをもう一度確認させていただくと、私は皆さまのご意見を伺っている限りだと、やはり新博物館は必要だという意見のほうが大きいだろう。その際に、まず収集保存に関しては、先ほど委員から言っていただいたが、私はやはり、博物館をつくるのだたらどこでもこれが一番基本になるだろうと思っている。

それから調査研究については、今日の話の中ではあまり大きく具体的に話されたわけではないが、人、学芸員によって違うのだということは皆さん、認識されているとおりである。

それから発信連携については、本日乃村工藝社さんのものを見ていただき、皆さんがあちらこちら歩いて、何が足りないか、何が足りているかということはだんだん見えてきていると思われる。私たちが今まで気が付かなかったような、夢のような博物館をつくるためにはどうすればいいかを少し考えたいと思っている。

いろいろな方策があるだろうと思うが、私が気に入っているものの一つに、塩尻の図書館がある。30万人規模の図書館である。逆に言うと、あの図書館によって地域づくりをしていこうという決意である。なので、それぞれのところで決意を持って何をするかという行政判断とともに、私たちも「これが必要です」ということは、しっかり訴えていきたいと思う。

その意味で、本委員会の委員の皆さまは非常によく勉強していただいているが、多くの人が博物館に行かない理由は、今までの博物館しか見ていないからではないか。それはおもしろくないので、できるだけ見ていただくようにしていきたいと思う。

それから本委員会では最初からずっと言ってきて、ここに小林委員に来ていただいたのもそうなのだが、育成の部分、子どもたちを大事にしましょうというのは、1回目の委員会からずっと出てきていることである。何よりも市民を前提にして新しい博物館をつくっていかねばいけな

い、そういう意識の下だったら新市立博物館こそが理想論だと、私は思っている。  
その上で、となれば順序なので、私たちは一応三つのうちどれが一番いいかということを経験的に意見として言わなければいけないが、ただ一方で、先ほどのようにこの理想をやるためにはどうしても耐久年数、それから今までやっているところの電気代その他、維持費の関係もあるので、基本的に新市立博物館をつくらうとしたら嫌でも統廃合、あるいは廃止することを考えなければいけない。  
そのときには何をもち、基準にして考えたらいいのかということが次の段階に論じられなければいけない。今日皆さんには宿題として持って帰っていただいて、最終的には評価書、これは要るか要らないかとかというのをちょっとお考えいただきたいと思う。そのことを考えていくための材料として、資料を作成した。

(熊井係長より2回目に送付の「博物館・美術館の現況と利用継続性の検討」資料につき説明)

委員長・どうもありがとうございました。今日は2時間用意して、皆さまから一番重要な部分のご意見はいただいたが、統廃合するに当たって、この辺の視点だけはお互いに共有しておきましょう、というようなことを少しやっておかないと、みんなばらばらになってしまうだろうと思いい、残りの時間は、こんな視点からお互いに評価しませんかというようなご提言をいただけたらと、時間を取った。

ある程度は事務局から図は出ているが、そのことを含めて認識をしたいと思うので、この辺は特に評価したらどうですかというようなご意見があれば、言っていただきたい。

那須野課長・ちょっと補足させていただきたい。評価するに当たり、建物を存続させるかどうかという視点の中で非常に大きな要素を占めるのが建物の、耐久年数とか耐震化ができていくかどうか。これは訪れる方に直接的な影響があるものですから、耐震性を満たしていない施設というのは基本的には短中期的には持たせても、長期的には無理だという判断をせざるを得ないというのは、まず念頭に置いていただきたい。

もう一つ大きな視点になるのが入館者の関係である。入館者が少ない施設については、はたして、今後もそれを必要としているのかどうかという根源的な部分の考え方にもつながっていくので、ここをどういうふうにか考えるかというのも一つの見方だと思われる。というのは、本当は、われわれは博物館、美術館の業務というのを入館者数だけで評価するというのはしたくないわけである。収集とか調査研究とかそういうことをトータルで考えて本当は業務があるのに、一般的にどうしても入館者、人が多く入ればよくやっている、少なければ努力が足りないというふうにか評価されることがままあるということである。

例えば、郷土博物館については直営になってから5000人で推移していたのが、最近7000人ぐらいに増えた。これは文科省の補助金などを積極的に取り入れて、ちょっと業務過多というぐらいにしているいろいろな企画展を打ってきたということがあつたのだが、やはり施設が限られると、それ以上に人を増やすのは、なかなか難しいのだからという、そんな印象を私は受けている。

例えば5000人から7000人来て、じゃ、1日にどのくらい入っているかと割り返すと、大体20人から25人くらい入っているという計算になる。ところが、新しい施設の「みらい」ホールとギャラリーの併用だが、1日平均で1000人くらい入っているし、それから「きぼう」にいたつても500人くらい入っているのではないかと思う。これは図書館プラスとして、憩いの場とか、そういう要素を取り入れることによって今の時勢に合っているというのがあると思う。

博物館もそういう要素を入れて建てれば、たぶんそれなりの増加が見込めるのだからと思うが、今のキャパの中では、おのずとどんな企画展をこれでもかと打つても限界がある。そういう中で入館者数の評価をどうするか、というところを考えなければいけないと感じている。

一応その辺も踏まえてお考えいただければありがたいなと思っている。

委員長・どうもありがとうございました。今、事務局のほうから話があつたように、まず一番大事なのは

耐震対応できているか、できていないか。これは非常に重要で、耐震ができていないのだったら人に来てもらう以上、そこにお金をかけて造り直しをしなければいけない。それが本当に効果的かどうかという視点がありますよ、ということをも、全員の認識として持っていただきたい。それから、いろいろな説明があるが、よく言われるのは入館者がどれだけいるかということ。逆に言うと、入館者が少ないところは1人1000円ずつ持って帰ってもらったほうが楽なところが幾らでもある。ただ、それは単なる入館者の問題ではありません、ということを一応確認させていただいた。

長野県内がなぜ弱いのかの理由の一つは、県立歴史館には大きな展示場がない。だから大きな展示を持ってくることができない。大きな展示場がありさえすれば、例えば今度「真田丸」をやるといので、必ずNHKが動く。真田丸関係だったら、相当広いところでも入る人数が一遍に何万人か違って来る。そういう意味でいうと、環境と入館者とはセットにならないということを一応承知した上で、でも入館者は少しお考えいただきたいということだと思ふ。

そういった意味で、お互いにここで共有しておいたほうがいいことがあったら、言っていただきたい。

委員・耐震に関して、4ページのところで、耐震のところ、x、がある。空欄もある。は耐震構造オーケーだというのが分かったが、空欄は、これもオーケーという意味で解釈していいのか。

熊井係長・すみません、私どものほうでも判断の付かないものについて、でもxでもでもないという表示になってしまっている。耐震基準も何段階があり、大きく考えると昭和56年6月以降に建てられたものについては、一定の耐震は満たしていると考えていただいて結構だと思う。最近はまだ、その次のレベルというようなことで、それで十分ということではないかもしれないが、一応の目安としてそういうことである。

そうすると、印の付いていないところを見ていくと、白井吉見も平成3年、飯沼飛行士も平成元年、近代美術館も平成4年、節郎館が平成15年、田淵館が平成2年、陶芸会館が昭和58年なので、印の付いていないところは一応 といつか、そのときの基準は満たしている。それで、堀金は駄目である。昭和54年と入っている時点でx。穂高の文書室は、ここに入っているものをどこかに持っていかなければいけないという話なので、ここはもう横棒でよい。鐘の鳴る丘集会所はxです。昭和56年と書いてあるが、移築ということですので、これはxである。申しわけございませんでした。

委員・管轄機関のところ、高橋節郎さんは市直営になっている。財団になっているけど。

熊井係長・大変失礼しました。申しわけございません。美術館の2番、高橋節郎記念美術館は「指定管理施設(公財)安曇野文化財団」と書いてあるが、これは誤りで、市直営である。申しわけございませんでした。訂正をお願いしたい。

委員長：よろしいでしょうか。特に何かご質問等がございましたら、あるいは意見として集約しておいたほうがいいというような。

先ほどのご意見の中で、美術館に関しては今のままでいいのではないかというのがあったが、代替が可能か可能でないかということが側面として出てくる。今までの話のとおり、新市の博物館を仮につくる場合であっても、全ての機能をそこに集約することはできない。現在持っていて、十分機能しているものについては、やはりそれはそれなりに使っていかなければいけないだろうと思う。

その辺を含めて何か今後、皆さんに評価していただくに際して、この辺には着目していったほうがいいのではないですかというご意見があれば、引き続きお願いしたい。

委員・今までの検討の中で、豊科郷土博物館と豊科近代美術館は基幹施設にしていくと押さえられている。という場合には、やはり基幹になるべくある程度の見方をしていかなければいけないのではないかとと思うので、そこら辺もちょっと併せて考えていったほうがいいのではないかと。

委員長・ありがとうございます。基幹の意味について一度ご説明いただきたい。

熊井係長・基幹博物館、美術館とは、これはケース1、2、3において、ちょっと変わってくる。ケース3

においては既存施設を原則利用ということなので、博物館は今おっしゃったように郷土博物館、美術館は豊科近代美術館を一応基幹と位置付けた中で考えていこうというという意味になる。ケース2の場合は、今日の資料の中には出ていないが、以前お配りしたように、基幹博物館・美術館をある程度増改築をした中で統合を若干しながらも引き続きやっていこうという基幹美術館・博物館であり、郷土博物館と近代美術館が位置付けられる。

新市立博物館を新たに造るというケース1においては、新市立博物館自身が基幹博物館というようなかたちになってくる。基幹博物館・美術館というのは、安曇野市文化振興計画の中で基幹博物館は郷土博、基幹美術館を豊科近代美術館としていくというような書き方もあるので、それをなぞってそういう言い方をしている。あくまでも今後の3つのケースにおいて、ケース2、3であれば今のイメージでよろしいと思われる。ケース1の場合は新市立博物館が主ということで。むしろ残る分館みたいなどは、理由があつて残る、くらいのかたちで考えていただければというふうに思う。

那須野課長・従って将来的には、美術館と博物館は条例上も2つにしたいということで、どちらかに分類されていくということである。例えば豊科近代美術館を基幹美術館とした場合、節郎だとか、田淵はさっきもちょっと議論があつてどっちに入るかという問題があるが、美術館グループは豊科、今の近美のほうに付けていく。博物館のほうは義民記念館とか、そういう博物館的な要素のものはそっち。それで基幹博物館、美術館で安曇野市全体の博物館なら博物館の方針というものを決めて、そしてお互いに役割を果たしながら運営する、そんなイメージで考えている。将来的には、この議論の中でそういうところにまとめていきたい。今はばらばらの設置条例でなので、ばらばらの運営の目的でやっているわけで、重複やすり合わせが必要な部分はいっぱい出てきているが、基幹博物館の中で、それぞれ美術館、博物館の中で運営していくということであればその辺の統制がとれてくるのではないかと、という考えである。

委員長・私の理解では、ケース1の場合は、博物館は基本的に新博物館のみになる。それ以外の部分に関して、どうしても皆さんの評価で、これは残したほうが良いという場合だったら残すことになる。ただ、もう一方で新市になってから随分美術館の増築等をやっているんで、美術館そのものは独自のものになっていくだろう。つまり、これは分かれていかざるを得ない。その中で、先ほど話が出た田淵行男記念館の場合は、美術館に行くのか。先ほどのお話では、博物館としての要素は相当ある。それからもう一つ、私は個人的には田淵行男記念館の場合は景観、全体の観光景観というもう一つの、全く違う要素も入ってくるだろうと思っている。

大きくいうと、今日のケース1の場合で見ると、あまりほかのことを考えずにぼーんと大きく新博物館を前提にした場合にはどうすればいいかということではないかと思う。他にご意見等ございましたら。

委員・私の一番最初の質問に戻るが、例えば私は個人的に、陶芸会館はもう廃止でいいと思う。そうすると、もう一つ廃止というD項目があると、非常に評価しやすいのだが。

那須野課長・それは他館との統合ということで、美術品は全部美術館に引き上げる。という意味か？

委員・そういうことである。

委員長・今お話にあったように、やはりいろいろな要素を持っているだろうと。建物としてまだ使える機能の部分があるのか、ないのか。先ほどのとおり、評価をまずしていただいた上で、私たちからあれは必要ないですよ、ということは提言してもいいと思っている。いいものをつくろう、あるいは次の時代をつくろうとするときには必要のないものを切っていくと新しいものはできない。それは、やはり私たちとしても意識しなければいけない。

今回ケース1で、皆さんの意見も含めていうと、理想論としてやっていくときには古いものに関しては切ることをするためにも評価をきちんとしていただきたい。そのための評価の基準として、今まで挙げたように、耐震の問題があつたり、今のところお客さんはあんまり来ていないですよ、というようなことがあつたりしている。けれども、まだこの辺も少し付け加えたらどうですか、逆に言うと、人は来ないかもしれないけれども、これはこういうふうになって重要だから、その

辺は少し視点の中に入れておいていただけないでしょうかということがあったら。もう少し時間があるのでご意見をいただけたら幸いである。

よろしいですか。今までいろいろな意見が出てきて、それから恐らく、今日既に委員からも新博物館をつくる時にコストの問題を考えなければいけない。コストをかけてもいいか悪いかということを考える必要があるという話が出た。現在ある博物館の場合であっても、コストの問題って必ず付いて回る。とりわけ新博物館をつくるに際しては、従来のものではとてもやり切れないところがあるので、その統廃合は市としても今回新しい市庁舎ができることを機会にして考えざるを得ない。

そういうこともあり、私たちとしては新博物館をつくるのだったらこのような部分に関しては統廃合すべきだということかたちで、次回、皆さまのほうからいただいた評価書を前提に少し論議させていただく。その中で改めて、ケース1の場合、例えば、水がいい、あるいは安曇野の文化について語りましょう、あるいは人物についてというのが出てきたが、そういったことを含めてもう一回論議させていただくとか。

かたちを変えて言うと、前はそのままの場合だったらどうかという話をした。今回は全く対極で、ある意味では今までの流れからすると、本来あるべき姿ともいえる新博物館をつくるのだったという論議をした。この次、もう一回こちら辺を含めてやった上で案としてどうにもならないとき、その中間案についても検討しておく。

最初に、三つの案の中から検討してくれということをお願いされているので、そんなふうに話を持っていきたいと思っている。

## (2) その他

委員長・皆さんのお考え、私が論議しなければいけないことはほぼ終わったが、ご意見があれば、まだ時間があるので。

那須野課長・次回、先生がおっしゃったように皆さんの評価に基づいて、実際に廃止や統合をすべき施設、いつごろからそういうふうにしていったらいいかも含めてたたき台をつくらせていただく。そこでまた、それがいいか悪いかという議論と、新規建設の場合、具体的にいつから新しいものができて、統廃合をすべき施設が明らかになると、当然それぞれ廃止される施設の役割をどこで補わなければいけないのか、それを博物館の中にどういうふうに取り込んでいったらいいか、結局どういう博物館をつくったらいいかという、そういう議論の中にまた戻ってくることもあると思われる。

私どものほうで、これから皆さんのご意見をいただいた部分と宿題を合せて資料をつくっていく。

実は、早めに小林先生に聞けば良かったのだが、学校の利用というところ、次回小林先生にきちんと聞きたいと思っている。

実は博物館の授業でやっている、学校ミュージアムとか昔の暮らし体験講座というのがあり、出前講座は非常に人気が高い。使われていない民俗資料も、展示しておくものは誰も見に来ないのだが、それを使って昔の暮らしを体験してみようという、市内全ての学校からリクエストがあってとても応えきれないという実態がある。授業の内容に見合う使い方ができると非常に学校の利用が進むというのは正直びっくりしている。

イギリスのナチュラル・ヒストリー・ミュージアムに性教育の展示があり、学校ではしにくいだけれども、そこへ生徒を連れてくると、学芸員が説明して授業ができるというセッティングがされている。たぶん今、学校は外へなかなか出られない。バスも用意しなければいけないとか。

でも、学校側で利用できるような展示がなされており、安曇野市では授業で使えるというものにしていければ、確実な利用が見込めるのではないかと、こういうところも要素として入れてもいいのではないかと考えている。

そんなところも含めて、次回またご意見を頂戴できればと思う。たくさんの方に、新しい博物館を建てるときのイメージとして、今言った意見のほかにこういうことを言っておけばもっとイメ

ーじしやすいとか、要素的なものがあつたら。今日はだいぶ意見をいただいたので、それだけでも十分だと思うが。

委員・全部要素が入っているのは大切だと思う。一番初めに、私が何力所か研修とかで行っていてという話をしたが、博物館の要素で人を呼ぶのも大事だと思う。

笹本先生がおっしゃった空間という点では、植物園と一緒にして人が集まるようにしたり、そういうのも進めたらいいと思う。今の子どもたちは視覚的に訴えるもの、そういうものを取り入れることが大事。

教えていただきたいのだが、安曇野に国営公園があるが、県からも補助が出ているのか、市からはどのくらい補助が必要なのか？

那須野課長・恐らく出ていないのではないかと。国営ということだから。

委員・あそこもかなり充実しているので、同じようなものをお金をかけてつくってもどうか。例えば郷土資料館でもう既に見どころの紙を置いて、地図を置いて、そこを見ていくといいですよということを案内していた。前から窓口が必要だなんて知らないことを言っていて恥ずかしかったのだが。そういうことで、例えば入館料を200円取ったら、国営は本来100円だけれども、〔こちらの〕200円を入れますよとか、こちらで紹介したのだからと。はっきり言って、国営に入っている人数は少ないと思われる。入館者数は無料のときとイルミネーションとかで稼いでいると思うので、先ほどから言っているように入館者数ということだけで判断するというのはちょっと危険もある。

そういうことで、国のものと一緒にできないのか、と考える。あるものを利用して、出費も抑えて、ともに成り立っていくとか、入館者数とともに確保していくとか、そういうことも考えられないのかなど。すごい素人考えなのだが、そんなことを思った。

子どもというのは、今日日曜日でどうするかというとき、美術館、博物館にでも行くかというとき「えー、博物館」と。今のイメージだとそうなのだが、「やったやった、博物館だ」というふうに子どもが言えるようなイベントや企画とか、催し物とか、そういうのをやっていけたらもうけものというかしめたものというか、そういうふうにしたいと思っている。

委員長・基本的にそれぞれの博物館は同じような意味を抱えている。ただ、今まで行政ごとに勝手にやっているのだから、例えば大町の山岳とここがどういうふうに関係するかとすることは、それぞれのところで全く考えていなかった。

だから逆に言うと、安曇野市が新博物館をつくる時、私たちはあえてこの部分はこういう理由でつくらなかった、近隣の市町村とともに栄えていく方策として博物館もあるという新しいテーマをつくったらどうですか、という提言として入れ込んでいきたいと思う。

繰り返すが、今日はケース1で、皆さん全員、今日伺っている限りだと新博物館は新たな市の発展のためには必要だし、いいだろうという話は既に確認された。どれを三つの中から選ぶかというのは、最終的にまた別の話だが、新博物館をつくるということに関しては今のようのご意見が出て、その上で、そのためには統廃合もやむを得ないので、それを含めて次回話し合いながら今のようないいことも少し入れ込んでいきたいと思う。

最後に、極端かもしれないが、私はもう一回開き直って考えると、ずっと子ども、子どもと言い続けてきた私が、逆に今の子どもたちが本当に博物館に行けるのか。これだけ教育や何かで縛り付けられている人たちが、土日まで引っ張っていいのいいのか。

先ほど課長から、学校に出向くものすごく評価が高いと。だったら学校に出向いたことは、博物館に来てもらったのと同じカウントになる。そうすると逆に目的意識がはっきりできてきて、子ども用には徹底した出前博物館。それで、博物館そのものは大人の人に本当に楽しんでもらおう。とりわけ、例えば私のように、そろそろ年齢を重ねた人間にとって本当に楽しいのは博物館といえるほうがいいのか、そういう部分も実はどこかで考えなければいけないと思う。

私は、何度も言うとおりの、あれもこれもということをやればやるほど特徴のないものが出来上がってきて、薄っぺらなものになってくるというのが自分の経験としてある。そういうことを含



めて次回以降に話し合っていきたいと思う。

今日はほぼぴったり、今のところ軋轢も生じないまま終わりそうなので、今日はこれで。事務局のほうに議事をお返すする。

委員・先生がぴったりと言っているところ申しわけないが、課長がおっしゃったところを後押しすると、いろいろと歩いていると出前講座はとて素晴らしいということを各館から聞いています。それをまとめて何かしたいという考えがあるということが情報として入ってきている。とて素晴らしいということである。

委員長・はっきり言って、学芸員さんたちが変わってきて、学芸員さんたちがどれだけ動いてくれるか。今まで、幾つかのところを私は歩いているが、真田の宝物館に市民の皆さんが集まるというのも、あれももともといた学芸員が非常に良くて、よく組織したからである。今日も何人かの人から出てきたが、人づくりができる学芸員を用意すると、実は展示以上の力を持つ。とりわけ子どもたちに対して何を訴えたいかということを持っている学芸員さんがいてくれると変わってくる。そういう意味で、新たな博物館を、博物館としての館だけではなくて、むしろ積極的に人として動いてくれる人の博物館でもあってほしいと思う。それはまた今後少しずつ論議したいと思う。

委員・すみません、1点だけ。今2月だが、この前の会合で、8月ぐらいまでには答申を出して、この会議の役割も終わると言う話を言っていたような気がする。これからが議論の伯仲するところというか後半にかかるわけだが、ただ昨秋、ここに皆さんにお集まりいただき、私もここに参加させていただいて、一つお願いしたいことは答申を出したらこの会は解散というのは非常に寂しいなというのを実感している。答申を出すのはもちろん仕事なのだが、その後、先ほど市民のパワーをというお話をさせていただき、この会がそういうものの火付け役にならないかなど。具体的に言えば、安曇野市の博物館を語る会でもなんでもいいのだけれども、なんらかのかたちで任意のグループみたいな、お茶飲み会でも勉強会でもいいのだけれども、役割を終えた後に何かかたちを変えて存続というか、市民にアピールし続けられるようなかたちが考えられないかと。まだ解散するまで時間があるので、たくさんのお考えがまとめれば、そんなこともありがたいかなというふうに個人的には思っている。

委員長・ありがとうございます。じゃ、事務局から。

那須野課長・まだ議論の途中だが、せっかく集まったメンバーなので、引き続きなんらかのというお話だが、議論が全部終わった段階で、皆さんでお諮りいただいて、任意の会として、勉強会としてということによっていくのであれば、またそれはそれで考えることなのかなというふうに思う。要綱に基づく会とすれば、一応検討が終われば終わりなので、その段階で、有志でやるかどうかということについてはまたご検討いただければと思う。

それともう1点、新聞に載ったが、「安曇野市公共施設再配置計画削減にかかる基本方針」というのが出された。詳細については、まだ発表になっていないが、今後、こういう議論のある、なしにかかわらず、画一的な視点で統廃合も含めて施設を再配置していくという検討が同時並行でなされている。これについては、担当所管と一応連絡調整をして、来年度においてすり合わせをしていくことになっている。当然ここで残すものが、向こうで廃止になったり、ここで廃止にするものが実は残ったりというようなことがたぶんあると思われる。そういう発表があるかもしれないが、それは今後調整していくということでご了解をいただきたい。

#### 4. その他

熊井係長・重ねてお願いするが、評価表をご記入の上、3月6日をめどに事務局までお送りいただきたい。次回の日程は、今のところ4月23日木曜日午後1時半から、場所は明科でと計画している。2カ月後になるので、場合によっては変わるかもしれないが、基本的にはこの日で進めていきたいと事務局としては考えている。近くなったら正式な通知を差し上げる。また、先ほどの評価票だが、集計して事務局とコンサルで精査し、会議の事前資料として十分見ていただく時間があるようにお送りしたいと考えている。ご自宅で熟読の上、ご検討いただければと思う。よろしくお願

いたします。

## 5. 閉会

北條部長・熱心な議論を大変ありがとうございました。以上をもって、第4回安曇野市新市立博物館構想策定委員会を閉会する。本日はお疲れさまでございました。ありがとうございました。

以上